

# 事業完了報告書

外国人に対する実践的な日本語教育の研究開発

神戸YWCA学院専門学校

## 1. 事業委嘱期間                   平成19年10月1日～平成20年3月31日

## 2. 事業の趣旨

近年、日本に在住する外国人が増加の一途をたどっている。私たちの生活の中で、在住外国人と日本人が、隣人として、また市民社会の一員として共生していく時代が進行している。在住外国人は、日本の総人口の1.5%、数にして200万人を超えており、それは統計の面からも裏付けられる。一時的な滞在者である旅行者などとは違って、在住外国人は生活者、労働者として日本社会と深く関わっており、日本語の必要度も高い。日本各地で日本語学習支援が熱心に取り組まれているゆえんである。このような状況に対応して、現場で役に立つ実践的なカリキュラムが現在、切実に求められている。

今回、私たちは文化庁の委嘱を受け、「外国人に対する実践的な日本語教育の研究開発」のカリキュラムを開発した。その目的は、カリキュラムを具体的に明示することによって、各地で展開されている外国人学習者に対するボランティアの日本語学習支援がより効果的に行われることに資するためである。

今回、私たちが開発した、このカリキュラムが対象としているのは、日本に定住する外国人の日本語学習者(以下、学習者)のうちの、主に主婦層など昼間に日本語を学ぶ環境にある学習者で、全くの初心者から日本語能力試験の3級レベル、おおむね初級の学習者を想定している。

また日本語学習支援ボランティアが特別な専門的な知識がない場合でも扱いやすいよう考え、このカリキュラムを使用する際に留意してもらいたいポイントなどを丁寧に述べたガイドブックを作成した。学習形態は学習者とおしゃべりを楽しむような形をとり、教材には学習の進め方や日本語についての基本的な知識がわかりやすく提供されている。

自律学習については、一週間に一回か二回の日本語学習だけでは日本語でコミュニケーションするには不十分なので、いくつかのアイデアを提供し、日本語教室での学習と自律学習が有機的に結びつき、習得がすすむようにした。

最近の日本語教室は日本語を学習する場だけではなく、学習者が友人と会って情報交換したり、生活上の相談窓口としての役割も有している。このカリキュラムと話題カードなど(後述する)を使って、学習者とボランティアが情報交換を含む日本語の会話を楽しく展開し、その会話を通して学習者が家族や仕事など身近な話題で話したり、聞いたりする能力を身につけることを目指している。

### 3. 事業の概要

#### (1) 開発の基本方針

- 1) 学習者とボランティアが互いに興味・関心のある話題で会話ができる。  
テキスト中心に文法を学ぶのとは発想が異なり、話したい話題で互いが会話を続けながら文法も学習できる形をとる。
- 2) 日本語教育や学習支援についての知識や経験があまりないボランティアにも扱いやすい。  
従来、日本語支援をするためには特別な勉強が必要だとされているが、具体的な学習方法や日本語の基礎的な知識があまりなくても支援ができるよう工夫をした。
- 3) 話題シラバスで構成されているが、提示された文の中にある文型（日本語の骨組み）を意識しながら学習を進める。  
日本語が話せるようになるにはやはり日本語の構造を知り、練習を重ねる必要がある。学習をおしゃべりで進めつつ日本語の力をつけるための工夫をした。
- 4) 学習者の自律的な言語活動を支援する。

今日、多くの地域の日本語教室でボランティアが外国人に日本語支援をする機会が増えてきている。それらのボランティアの多くは、外国人への日本語教育や日本語学習支援の経験や専門的な知識がほとんどないというのが現状である。勿論、それぞれの教室では、ボランティアへのオリエンテーションや勉強会等を行い、皆で試行錯誤を繰り返しながら、より良い支援活動ができるよう努力が続けられている。また、学習者の背景や地域性を考えた独自の教材や学習方法も開発されてきている。しかし、多くの教室では既刊の日本語教科書を使って、まず語彙や文型を導入し、運用練習を行うという、従来の文型積み上げ式の学習活動が行われているのではないだろうか。

確かにテキストが決まっていて、導入する語彙や文型が決まっていると、一度手順さえ覚えれば、専門の知識や経験が少ないボランティアでも、何とか1時間半か2時間の学習をことなく終えることができるかもしれない。しかし、その日の学習項目になっている文型を使って話せることには限りがあり、「まず文型ありき」という学習スタイルでは、学習者やボランティアがお互いに知りたいことや興味のあることを語り合うのは難しいと思われる。本来文型積み上げ式のカリキュラムでは、その日の学習項目だけではなく、既習の語彙や文型を応用して会話を展開するようになっているが、適当な既習語彙や文型を駆使するには、やはり経験が必要であると考えられる。また学習者側にとって、週1~2回のボランティア教室での学習がテキストを用いた文法積み上げ方式であると、その学習者の実生活に役立つ日本語を学ぶまでに時間がかかりすぎる。一人一人の生活において必要度の高い学習内容が求められている。

このような考えから、最近では、教室の外で行われる言語活動のシミュレーションとしての学習ではなく、教室の中で学習者とボランティアがお互いに興味のある話題でおしゃべりを楽しんだり、情報交換をしたりするような活動をしようという動きが盛んになってきている。しかし学習時間を、ただ、とりとめのないおしゃべりで終わってしまうのではなく、学習者もボランティアも満足し、日本語の力もつくようにするには、やはり何か「しかけ」が必要になってくる。

本カリキュラムでは「話題カード」を使って、母語で意味を確かめながら会話を展開し、必要に応じて「場面表現カード」でいろいろな場面で使用する表現を学ぶという方法を考えた。また、話を進めるのに役立つ視覚的な教材なども開発の計画に入れている。そして、各「話題カード」には

文法構造を示し、ボランティア、学習者双方が構造を意識し練習できるように図っている。ボランティアが学習者に向けて使えるような文法説明の方法もヒントとして入れてある。これらは、学習者が日本に定住し生活するための日本語を学ぶには、日本語の構造を意識し文法として使えるようになることが前提であると考えからである。

## (2) 調査・開発の過程

### 1) 調査

カリキュラムの開発に当たっては、まずいくつかの日本語教室などで現在行われている学習活動について、ボランティア、学習者双方から聞き取り調査を行った。現在の学習において双方が望んでいる点や困っていることなどを拾い上げ、それを参考にして学習の形態、カリキュラムなどを考えた。また、このカリキュラムの基本方針である「ボランティアとの会話を楽しむ」というコンセプトを実現するために、どのような話題で話したいか、という話題の選択・選定についても調査した。それに伴う語彙についても同様である。

聞き取り調査を行った地域は、在住外国人の国籍や職種によって特色があり、地域によって必要とされる情報や話題の分野は異なる部分もあった。例えば工場労働者の多い地域では、他の地域と違って、「趣味」についての話題はほとんど話されていない。一方どの地域でも、病院の受付などのやり方に関する情報を知りたいという要望は高かった。このような調査結果を踏まえて、大体において重なる部分を採用してカリキュラムを作成した。調査結果は、事前に想定していた内容とは異なる部分も多く、「生活者の日本語」という視点からみた場合、既存のテキストとのずれも感じさせられた。この視点からのニーズ調査の重要性をあらためて感じた。

調査に協力していただいた機関（個人）は以下のとおりである。

① KFC（神戸定住外国人支援センター）
②カトリック社会活動センター
③京都YWCA日本語教室「洛楽」
④神戸中国帰国者日本語教育ボランティア協会
⑤カトリック鷹取教会
⑥尼崎市大庄公民館読み書き学級
⑦池田日本語ボランティア友の会
⑧神戸東灘日本語教室、
⑨その他 個人

また「会話を楽しむ」というコンセプトをカリキュラムに生かすために、日本人の自然な会話の流れについての調査も並行して行った。私たちがさまざまな場面で交わす会話を録音して文字に起こし、その会話に現れる自然なやりとりや話題の移り方を観察するという方法をとった。この結果から、各話題をどのように展開していけばよいか、その方向を考えた。

以上のような調査を経て、カリキュラムの作成に取り掛かった。その過程で、実際に現場で支援に当たるボランティアがこのカリキュラムを十分活用するための教材・教具も開発した。話題カード、場面表現カード、ことば図鑑、などである。[5. (3) (4) 参照]

## 2) 講座・試用

このカリキュラムが実際の現場で役立つのか、またどのような反応があるのかを調査するために、試用を行った。このプロジェクトに関わる期間が短く、教材・教具の作成はカリキュラムの一部に相当する部分しかできていない。そのため、完成した部分のみを実際に使用する教材の形にまとめて試用の材料とした。

試用の対象は、聞き取り調査に応じてもらった教室ばかりでなく、他にも広く協力をお願いした。まず、その使い方を説明するための講座を実施し、次いで試用を行ってもらった。試用の結果については5. 事業の成果で詳しく述べる。

講座を行った機関は、以下のとおりである。

①神戸中国帰国者日本語教育ボランティア協会
②K F C (神戸定住外国人支援センター)
③芦屋市潮見小学校
④神戸東灘日本語教室
⑤カトリック社会活動センター
⑥神戸YWCA学院専門学校
⑦徳島ボランティア協会
⑧その他 個人

講座では、まず当方が考えるボランティアで支援する際の意識の持ち方などを改めて確認した。そして、このカリキュラムが既存のテキストとは異なる発想で作られていること、よって使用方法もテキストとは異なることなどを説明した。

現在、多くのボランティアはテキストを中心にした学習支援を行っているようだ。そのため「先生」として日本語を「教える」という意識が強く、会話をしながら学習するというスタイルを理解してもらう必要があった。次に実際のやりかたを例をひいて具体的に示した。しかし、1回の講座では考え方を理解できても、具体的なやり方を身に付けるまでにはなかなかいたらない。時間をたっぷりとり、ワークショップ形式で実際にその場でやってもらうようにすると効果的であったかもしれない。

講座参加者は1回につき、試用を担当するボランティアを含め、1人から8人程度であった。

### (3) カリキュラムについて

#### 1) 対象とする学習者

日本に定住する外国人の日本語学習者で、日本語を初めて学習する学習者から、家族や仕事のことなど身近な話題について自分の考えを日本語で話せる初級後半レベルの学習者までを対象とする。

#### 2) 想定する学習形態

基本的には学習者とボランティアが1対1で行う学習形態。方法によっては、1対2などになっ

ても可能である。

### 3) このカリキュラムでの学習期間およびトピックの紹介

1年間を4期に分け、1期を3ヶ月と想定する。

各期は、週1回または2回で、ほぼ10回。

1回当たりの時間は1.5～2時間を想定している。

話題は以下の10のトピックを採用した。これは聞き取り調査の結果から、もっとも必要度の高い項目を選んだものである。

- ① 自己紹介    ② 学校    ③ 学校    ④ 国    ⑤ 買い物（スーパー、コンビニ、通販）
- ⑥ 食べ物    ⑦ 日常生活（ごみ、病院など）    ⑧ 余暇    ⑨ 出産・育児・結婚
- ⑩ 付き合い（近所、日本の家族）

各期を通してこのカリキュラムを用いる場合、以下のように考える。

第1期10回で、10の話題を選んでもよいし、いくつかの話題を2～3回に分けて用いてもよい。その際、ゼロ初級あるいは初級前半の学習者であれば、step 2か3（次項 レベルについての考え方参照）のあたりで会話が終わるだろうが、第2期になると、同じ話題の最初から始めると、第1期よりスムーズにstep 3程度まで会話を伸ばすことができる。

このように、一つの話題を重ねて使うことで、実力を培っていける。会話の内容は学習者によってまた時期によって変わり、同じカードを用いても新しい展開が生まれるはずである。

### 4) レベルについての考え方

各カードに **step1** のような表示が書いてある。これは難易度を示し、学習者の日本語力に応じて参考にする。カードでは **step** を分かりやすく色分けして示している。

step 1 「日本語に触れてみる」                      ゼロ初級、学習を始めて間もない学習者

step 2 「日本語を使ってみる」                      初級前半

step 3 「日本語でおしゃべりをする」              初級後半

語彙・表現、文法などの言語的な要素だけではなく、その話題に対する考え方、価値観、文化的要素を含むもの。

このシステムでは、話題カードでその会話を始めていって途中で続けられなくなった場合に、そのレベルはその学習者にとって「難しい」と判断する。その段階をだいたいの目安として **Step** で表している。初級後半だから **Step 3** から会話を始めるとは考えていない。どの会話でも初めは簡単な表現で始まり、だんだん複雑な内容に進んでいくパターンをとる形が多いからである。つまり、初級後半の学習者なら、**Step 1** をさっと通って **Step 3** に至ればよいと考えている。また、その会話が続けられるのであれば、初級前半であっても **Step 3** に進んでいけるわけである。会話を途中で切り上げるのは、他の話題に発展した場合と、その学習者の日本語能力において会話が続けられなくなった場合である。初級前半だから **Step 3** はスキップするという考え方ではない。



5) カリキュラムの内容

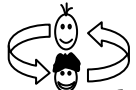


① カードに書かれた内容をQAで進める形式



ボランティアと学習者の学習を会話で進めるためにQA形式をとった。そして、その方式で会話を進めやすくするために、カード形式（「話題カード」）を採用した。

「話題カード」例

家族(Family)A-1

 : ごかぞくは なんにんですか。  
 たなか Gokazoku wa nannin desu ka.  
 : 3にん です。  
 リー San nin desu.  
 しゅじんと こども です。  
 Shujin to kodomo desu.

  
 How many people are there in your family?  
 Mr.Tanaka : Three.  
 My husband and a son/daughter.  
 Ms.Lee

 :  は なんにん ですか。  
 wa nannin desu ka.  :  です。  と  です。  
 desu. to desu.

かぞく(kazoku)	なんにん(nannin)	しゅじん (shujin)	こども (kodomo)	
family	how many	husband	child	
ひとり(hitori)	ふたり(futari)	さんにん(sannin)	ちち(chichi)	はは(haha)
one	two	three	father	mother

1枚のカードにはほぼQAいち往復のやりとりが書かれていて、ボランティアはそのカードにあるQAを使いながら学習者と会話をする。順にカードを追っていけば談話のひとまとまりが話せるように作られている。その談話の一連のまとまりを、分類表記「ABC・・・」で表している。会話の種類によって枚数は異なるが、例えば「自己紹介A」と分類された4枚のカードは、その話題を自然な流れで続けて話せるように構成されている。その学習者にふさわしくないカードが出てきた場合はスキップしてもいいし、また途中で他の話題に移ってしまったのなら、そこでやめてもよい。ボランティアはあらかじめ、会話の流れを確認しておくといよい。

**ユニット6 食べ物**

1	1	1
た: 毎日、朝ごはんを食べますか	た: 今朝、朝ごはんを食べましたか	た: 何を食べましたか/ のみましたか →
り: はい、食べます / いいえ、食べません。	り: はい、食べました。いいえ、食べませんでした。	り: <u>パン</u> を食べました。 <u>コーヒー</u> をのみました
		た: どうしてですか ↓
		り: ____から。

② 個々の学習者にとって必要度の高い場面、また話したい話題から始められるカリキュラム

ほとんどのテキストの弊害は学習者が即必要な日本語がすぐ学習できない点にある。その表現を学習したくても、それ以前の積み上げがなければ、その部分の学習は難しい。ふつう積み上げ方式のテキストでは仕方がないことである。そこで、このカリキュラムでは、どの部分からでも始められるように工夫した。

学習者によって話したい話題、必要な表現は異なっていることから考えて、どの話題から始めても、基本的な構造から順に学べるよう配置した。一つの話題が終われば、次の話題に移り、同じように構造を確認し、練習しつつ会話が進むようになっている。テキストを使い慣れたボランティアからは、やさしい会話は学習者にとって退屈なのでは、という懸念も出されたが、ほとんどの会話が初めは簡単なやり取りから始まることを考えれば、まさに実際の会話の流れと同様に話すことができることになる。よくできる場合はいくらでもそのやりとりから発展させ膨らませることも可能である。一つの話題は1回で終わらなくてもいいし、また一つの話題が終わっていないからといって、次回その続きから始める必要もない。

③ QAの内容や単語に翻訳をつけることによって、日本語が全然わからない学習者でも安心して使える。

学習者が会話を楽しむためには、使いたい言葉が手近にあってすぐ使えること、聞いたことばの意味がすぐわかることが必要である。特に成人の学習者は、さっき聞いた単語の音や意味を学習時間の間だけでも保持するのはなかなか難しい。今話されていることの意味がすぐわかり、言いたい表現がすぐに使えることは必須であると考え、話題カードの会話の内容、および関連語彙に翻訳をつけた。ボランティアは学習者にQAや各単語の意味の翻訳部分を示すとよい。

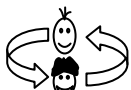
④ 話題カードの表面、裏面には、ボランティアが使いやすいような情報やヒントが書き込まれて



おり、1枚のカードで会話がスムーズに進められるように工夫されている。  
以下に各ポイントについて説明する。

i 話題カード裏面

ボランティアは裏面を読むことによってその文法の意味や使い方を確認できる。また写真や地図など準備しておく会話の助けになるもの、会話発展のヒント、どの話題カードに移って話題が展開できるかなどを知ることができる。学習の前にあらかじめカードに目を通しておけば、準備のポイントが分かるようになっている。

ii  「役割交代マーク」

会話をどのように運ぶかという点においては「役割交代マーク」を表面に記し、ボランティアが質問するだけでなく、学習者からも質問するように示唆している。「役割交代マーク」が必要なカードにはすべて記されているので、ボランティアが一方的なQAにならぬように注意しやすい。

iii ★「ことば図鑑」

カード表面の下方の枠には、学習者がその会話のなかで使いたいと思われるような語彙を選んで入れてあるので、学習者はカードの語彙を参照しつつ話したい会話を続けることができる。また、もっと話を広げるために★印で示す「ことば図鑑」で関連語彙を紹介した。


iv 文法構造を意識させるためのしかけ

このカリキュラムは会話で進める形の中で文法を意識させ、話しっぱなしで終わらないように、以下の工夫をした。

- ・話題カード表面の中ほど四角の枠で囲んだ部分は使用文型の構造を示している。会話を終えるごとにその内容を学習者に示すことによって、学習者の構造意識が培われる。また、その構造を意識した代入ドリルができるように工夫されている。表面下の部分の枠にある語彙は、代入練習が可能な語彙が選んである。

- ・ ◆ 「文法説明マーク」

新しい文法が出てくるたびに◆「文法説明マーク」で示して、その簡単な説明を裏面に書いておいた。より詳しい説明は「ボランティアのガイドブック 4. 日本語の文法」に載せた。

- ・  「頑張りマーク」

例えばて形などの活用形などは、会話の流れから離れてある程度の練習が必要になる。それを「頑張りマーク」で表す。基本的に活用形は先にルールを教えて練習する形はとらない。実際に使っていつか慣れてきた頃にまとめとしてルールを示すようにしたほうが実際的である。ルールを示した際に、その形を練習するようにすればよいと考える。

v ☆場面表現カード 「ボランティアのガイドブック」3) - 1 使い方の項参照

このカリキュラムは基本的にはボランティアと学習者の会話で進めていくが、日常生活の中では買い物や病院などさまざまな場面でよく使う表現や語彙がある。それらよく使う表現と関連語彙、及び翻訳が生活場面ごとに書いてあるものが場面表現カードである。その中から役にたちそう

なものを学習者のニーズにあわせて選びロールプレイのように練習できるように考えた。これは全部を網羅して練習するというものではない。想定している場面は以下のとおりである。

- ① あいさつ      ② 子どもの学校の先生との面談      ③ 買い物  
④ 病院      ⑤ レストラン      ⑥美容院・床屋

現在話題カードの形に完成しているのは、以下のトピックのみである。

- ① 自己紹介      ② 家族

残りの③以降の話題については、まだ話題カードの体裁に整えられていない。翻訳や注などこれから完成させていく作業が残っている。

vi わかりやすい使い方のマニュアルが「ボランティアのガイドブック」にまとめてある。

ガイドブックを読めば、話題カードの使い方や、始める前に準備することなど、具体的にわかるようになっている。

\*内容の一部をこの報告書の最後に参考資料としてつけておいた。

## 6) 文字学習について

短期滞在者の文字学習は本人の希望にまかされることが多いが、定住者の場合、日本での社会参加のためには文字学習は初習期から必要である。しかし、初級段階ではまず「聞く」「話す」が優先される。よって、先に文字学習を行ったうえで会話練習に入るという考え方はとらない。文字学習と会話学習は別のものと考え、平行して学ぶ形をとる。話せるようになったことを書くことで、文字学習がスムーズに進みやすいので、常に会話が優先すると考える。

文字学習のカリキュラム

- ・ 1日に決まった時間（例えば10分）、会話学習とは別に時間を取って毎回継続して行う。
- ・ 50音の読み書きを最初から順番に1字ずつ行うのではなく、以下のようなやり方をとる。  
話せるようになった語彙や文を文字に書く。  
そのために濁音や助詞「を」「は」「へ」などは順序を早めて教える。
- ・ 学習できる文字数は学習者によって異なるので、学習者に合わせたカリキュラムが必要である。
- ・ 自宅学習としては、毎日10分程度でできる宿題を日数分出す。
- ・ 文字学習は個人学習の部分が大きいので、ネット学習でも可能である。パソコンが日常生活にある学習者には現在使われているサイトの紹介もヒントとして挙げておきたい。

## 7) 自律学習について

週に1, 2回の学習頻度では、学習した内容の保持は難しい。次回までの間に自律的に日本語を使うような工夫が必要になる。そのために以下の副教材を作成する。

### ①「学習者のガイドブック」

- ・ 話題カード表面 冊子版

ボランティアと会話した内容を冊子にしてあるので、その日の会話の復習が可能である。

- ・ ことば図鑑

その日使った語彙の復習ができる。

・場面表現カード

これは冊子の形にはしないで、その日使った表現をコピーして渡すようにする。

②音声教材

場面カードの内容を録音したもの。学習した会話が音声面から復習ができる。

③実際の生活に出てくる読み物素材

実際の生活で読む必要に迫られるものを使い、必要な情報を早く得るための練習をする。

例：各種のチラシ、学校からのお知らせ、看板、宅配便の用紙、品物の性能などを知る。

(4) カリキュラムに基づいて作成した教材のリスト

1. 話題カード 一部完成。他の内容は冊子にまとめてある。
2. 場面表現カード 作成予定。内容は「ボランティアのガイドブック」3) - 1 参照
3. ボランティアのガイドブック
  - 1) はじめに
  - 2) ボランティアの皆さんへ
  - 3) - 1 使い方  
- 2 始める前に
  - 4) 日本語の文法
  - 5) 索引
4. ことば図鑑
5. 学習者のガイドブック

(5) 成果の活用計画

- 1) 全10課（自己紹介、家族、学校、国、買い物、食べ物、日常生活、余暇・趣味、妊娠・出産・育児・結婚、付き合い）の話題カード、ことば図鑑、場面表現カード、ボランティアのガイドブック、学習者のガイドブックの試用版を作成する。翻訳は英語、中国語の外に、できればポルトガル語、スペイン語も加える。
- 2) 近畿圏の日本語学習支援グループのための講座（使用説明会）を行い、本カリキュラム及び教材の開発コンセプトと使い方を説明し、試用してもらった後、その結果をフィードバックして教材化する。
- 3) 本事業で開発した話題カードはどこでも、誰でも使える一般的な内容になっているが、これを使用する各支援グループで、地域や教室の状況に合わせ、地域性のある話題（お祭りや行事など）や、地域に集住する学習者向けの翻訳などを進めてもらいそれをネット上で共有できるようにする。

## 4. 事業の結果

### (1) 事業の成果

1) 本事業ではまず日本人同士の会話の特徴を分析し、その後、近隣の日本語学習支援グループの協力を得て、学習者とボランティアの間でどのような話題で会話がなされているかを聞き取り調査した。今回開発したカリキュラムでは、その調査結果から、学習者が興味を持つであろう話題を10課分選んだ(自己紹介、家族、学校、国、買い物、食べ物、日常生活、余暇・趣味、妊娠・出産・育児・結婚、付き合い)。これらの話題について、一連の会話の流れを考えたが、そのうち自己紹介と家族の話題カードと、この2つの話題に関連することば図鑑の試用版を作成した。そして以下の日程と場所でまず開発コンセプトと使い方について説明する講座を行った後、各支援グループのボランティアと学習者に実際にこのカードを使った学習をやってもらい、開発メンバーが観察を行った。また学習後、学習者とボランティアの感想、意見を聞いた。

#### 講座

3月12日	講座	神戸中国帰国者日本語教育ボランティア協会	斎藤
3月12日	講座	KFC	高橋
3月16日	講座	芦屋市潮見小学校	斎藤
3月16日	講座	東灘日本語教室	藤川
3月18日	講座	KFC	高橋
3月27日	講座	中央カトリック教会	斎藤
3月27日	講座	徳島ボランティア協会	三隅

#### 試用

3月12日	試用	神戸中国帰国者日本語教育ボランティア協会	斎藤
3月12日	試用	KFC	高橋
3月18日	試用	KFC	高橋
3月22日	試用	東灘日本語教室	藤川
3月23日	試用	芦屋市潮見小学校	斎藤
3月23日	試用	東灘日本語教室	藤川
3月27日	試用	徳島ボランティア協会	三隅
3月27日	試用	中央カトリック教会	斎藤

### 2) 学習者の感想・意見

学習者からは概ね良い評価を得ることができた。会話や語彙の翻訳が日本語と一緒に書いてあるので、話の内容がすぐに分かるようになっていること、文の構造が一目でわかるように書いてあることなどが好評であった。「いつもよりたくさん話した気がする。」「従来のテキストより使いやすい。」「自分のことがいろいろ話せる。」「生活の言葉がたくさん学習できた。」などの感想があった。

### 3) ボランティアの感想、意見

ボランティアの方々からは様々な改善点も指摘されたが、全体としては学習者、ボランティア双方に有用であり、特に専門の知識が少ないボランティアでも一定の学習ができるので、今後改善をして教材化することが望まれるという評価を得た。

ボランティアからあげられた意見は集約すると以下のようなものである。

このカリキュラム及び教材の利点

- ① 情報が分散せず、1枚のカードに収められているので、手軽に学習が進められる。特に裏面に学習の手引きとなる情報が書いてあるので、ボランティアにとって使いやすいものとなっている。
- ② 会話や語彙の翻訳が日本語の文と並べて提示されているので学習者が内容を十分に理解しながら、会話を進めることができる。
- ③ 内容が架空のことでなく、学習者、ボランティア共に自分のことを話すので、話がしやすく、お互いの理解にもつながる。
- ④ このカリキュラムでは会話を中心にしながら、その中に隠れている文の構造を意識化することを狙っているが、これは文型積み上げ式の学習が苦手な学習者にも、受け入れられやすい。
- ⑤ どの話題カードから始めてもいいし、ひとつの話題のどこから始めて、どこで終わっても良いので、学習者の興味に合わせて学習が進められる。地域の日本語教室では短期間でやめる学習者や休みがちな学習者も多いが、そのような学習者に向いている。
- ⑥ 他の教材で学習していても、復習として使用するとより実践的な会話ができ良い。また、レベルチェックにも使える。
- ⑦ このカードをきっかけにして話を発展させることもできる。
- ⑧ ポイントだけが提示してある。初習者には質問がシンプルなので学習しやすい。

改善点・留意点

- ① 個人的なことに言及するので、気をつけなければならない。
- ② 使うカードの選択や学習者に合わないカードをどのように抜かしたり、変更したりするかの判断が慣れないと難しい。
- ③ 未習の語彙や文法事項の導入、練習のタイミングや押さえどころの判断が難しい。
- ④ このカードから話を発展させて良いということはわかっていたが、カードの流れがあるので、横道にそれにくい。発展のさせ方のヒントが欲しい。

4) 観察結果

- ① 学習者は会話を楽しんでいたようだが、会話に集中してノートをとることが少ない。その日学習したことを保持し、教室外での自律学習につなげる手段が必須である。
- ② ボランティアがカードを持って会話を進めると、尋問調になる危険がある。カードの提示のしかたを工夫しなければならない。地図やチラシ等の視覚的な補助教材をみながら進めると、和やかに話せる。
- ③ 従来のパターンプラクティスが身につけているボランティアの場合、会話の流れを考えずに、文型導入や代入練習をしてしまう。
- ④ 学習者に合わせて臨機応変にカードを選んだり、変更したりするのは難しい。
- ⑤ 自然な会話の流れを阻害しないという点を意識しているボランティアの場合、話が発展しそうなところで、次のカードに進んでしまう。

以上のような結果から、使用前にボランティアに対し、このカリキュラム及び教材について、マインドとスキル両面の丁寧なガイダンスを行うことが重要であること、また教室外での学習者の自律的な学習と学習した日本語の積極的な使用を促す具体的な手段の提示が必要だということが確認できた。

(2) 提言

今回開発したカリキュラムに関して、地域の日本語学習支援グループのボランティア、及び学習者の協力を得て試用を行った結果、従来のテキストを使った学習より、たくさん話ができ、楽しかったという感想が多く、学習者、ボランティアから寄せられた。今回試用版として作成したカード教材や補助教材は未完成で不備も多かったにもかかわらず、このような評価を得られた背景には、

学習者もボランティアも、もっとお互いのことを話したいと思っていたが、そのための適切なツールがなかったという現実があると思える。これまでに開発されてきた教材やカリキュラムの多くは、留学生や就学生を対象としたもの、あるいは日本語教育機関で使うことが前提となったものである。勿論、地域でボランティアが行っている日本語学習支援のための教材の開発も進められてきてはいるが、量的にも質的にも前者には及ばないのが現状である。

在住外国人は確実に増加しており、その多くは日本語教育機関以外での日本語学習支援を必要としている人たちであることを考えると、今後、このような地域の日本語教室のためのカリキュラムや教材の開発が、質的にも量的にも充実することが望まれる。そのためには地域の日本語学習支援を行っている人材と日本語教育を行っている人材が協力し、継続的な研究ができる基盤づくりが必要である。

### (3) 今後の計画

今回、文化庁より「外国人に対する実践的な日本語教育の研究開発」の委嘱を受け、「話題カードを使った会話学習」のカリキュラム及び教材の一部を作成し、近隣地域の日本語教室の協力を得て、試用を行った。その結果、学習者、ボランティアの双方からこのようなカリキュラムで学習したいという意見を多く頂いたので、引き続き研究・開発を行い、本カリキュラムが地域の日本語教室で使用できるようにしていきたい。そのための計画は以下の通りである。

#### 1) 2008年度 上半期

全10課（自己紹介、家族、学校、国、買い物、食べ物、日常生活、余暇・趣味、妊娠・出産・育児・結婚、付き合い）の話題カード、ことば図鑑、場面表現カード、ボランティアのガイドブック、学習者のガイドブックの試用版を完成する。翻訳は英語、中国語の外に、ポルトガル語、スペイン語も加える。また使用前のガイダンス（講座）の内容を検討し、マニュアルを作成する。これはグループ内でメンバーからメンバーへのガイダンスを促進するためである。

#### 2) 2008年度下半期

近畿圏の日本語学習支援グループで、開発コンセプトと使い方についての講座を行った後、グループで試用を行う。

#### 3) 2009年度以降

- ① 試用結果のフィードバックを行い、教材化を図る。
- ② 各地域や教室の状況に合わせ、地域性のある話題（お祭りや行事など）や、地域に集住する学習者向けの翻訳などを進めてもらいそれをネット上で共有できるようにする。

## ボランティアのためのガイドブック（抄）

1. はじめに
2. ボランティアの皆さんへ
3. ー 1) 使い方  
ー 2) 学習を始める前に
4. 日本語の文法
5. 索引

### 1. はじめに

私たちが住んでいる町や村に、近年、多くの外国籍の人たちや、日本国籍ではあっても、日本語や日本の文化を母語・母文化としない人たちが在住するようになってきました。それに伴い、そのような人たちの日本語学習支援や、生活面での情報提供等を通して、交流を行う日本語教室等のボランティア活動も盛んになってきました。しかし、いわゆる地域の日本語教室で活動しているボランティアの多くは、外国人への日本語教育や日本語学習支援の経験や専門的な知識がほとんどないというのが現状です。日本語が全くできない学習者と向かい合って、「さあ何を話したら良いのか…」と戸惑うボランティアも多いことでしょう。勿論、それぞれの教室では、ボランティアへのオリエンテーションや勉強会等を行い、皆で試行錯誤を繰り返しながら、より良い支援活動ができるよう努力が続けられています。また、学習者の背景や地域性を考えた独自の教材や学習方法も開発されてきています。しかし、多くの教室では既刊の日本語教科書を使って、まず語彙や文型を導入し、運用練習を行うという、従来の文型積み上げ式の学習活動が行われているのではないのでしょうか。

確かにテキストが決まっていて、導入する語彙や文型が決まっていると、一度手順さえ覚えれば、専門の知識や経験が少ないボランティアでも、何とか1時間半か2時間の学習をことなく終えることができるかもしれません。しかし、その日の学習項目になっている文型を使って話せることには限りがありますから、「まず文型ありき」という学習スタイルでは、学習者やボランティアがお互いに知りたいことや興味のあることを語り合うのは難しいと思われれます。本来文型積み上げ式のカリキュラムでは、その日の学習項目だけではなく、既習の語彙や文型を応用して会話を展開するようになっていますが、適当な既習語彙や文型を駆使するには、やはり経験が必要です。

このような考えから、最近では、教室の外で行われる言語活動のシミュレーションとしての学習ではなく、教室の中で学習者とボランティアがお互いに興味のある話題でおしゃべりを楽しんだり、情報交換をしたりするような活動をしようという動きが盛んになってきています。しかし1時間半か2時間の学習時間を、ただ、とりとめのないおしゃべりで終わってしまうのではなく、学習者もボランティアも満足し、日本語の力もつくようにするには、やはり何か「しかけ」が必要になってきます。特に初習期の学習者と長時間の会話をするのはなかなか大変なことです。

本カリキュラムでは「会話カード」を使って、母語で意味を確かめながら会話を展開し、必要に応じて「場面カード」でいろいろな場面で使用する表現を学ぶという方法を考えました。また、話を進めるのに役立つ視覚的な教材も合わせて紹介したいと思います。

## 開発コンセプト

本カリキュラムは以下のようなコンセプトで開発しました。

1. 基本方針
  - 5) 学習者とボランティアが互いに興味・関心のある話題で会話ができる。
  - 6) 日本語教育や学習支援についての知識や経験があまりないボランティアにも扱いやすい。
  - 7) 話題シラバスで構成されているが、提示された文の中にある文型（日本語の骨組み）を意識しながら学習を進める。
  - 8) 学習者の自立的な言語活動を支援する。
2. 対象とする学習者：日本語を初めて学習する学習者から、家族や仕事のことなど身近な話題について自分の考えを日本語で話せる人まで。
3. 想定する学習形態：学習者とボランティアが1対1で行う学習



## 2. ボランティアの皆さんへ

このシステムを作成するに当たり私たちが考えたことを、皆さんにお伝えします。

- ここでは「日本語を教える」のではなく、「日本語を通して外国の人といろいろな話ができる」と考えてください。先生と学生ではなく、対等なおしゃべりの相手です。
- これは日本で生活を始めたばかりの人、また日本語での日常生活が十分ではない人を対象に作ったシステムです。どのような日本語で話せばいいのでしょうか。少し想像してみてください。子どものことば？ ゆっくり話す？ 身振り手振り？ 写真や実物？  
どんな工夫でもまずはやってみましょう。そして振り返ってみましょう。
- 「いろいろな話ができる」ようになるためには、実は日本語の構造を知ることが重要なのです。でも「国語」でやるような文法を教えるではありません。「日本語」を外国語としてみた場合、どのような「構造」が隠れているのでしょうか。ヒントがガイドブックに書いてあります。それを参考にして話を進めていきましょう。
- これはテキストのように順番に進めていくシステムではありません。話したい話題から始めてください。どこから始めても「構造」が意識できるように作られています。
- できるだけ誰もが話せるような話題を選んでいますが、もし話したくないような話題があったら、その部分はスキップしてください。これはあくまでもおしゃべりするのための材料ですから、関心のない話題や嫌な話題は避けてください。
- 日本で生活するためには、まずは「聞くこと」「話すこと」が必要です。文字で読んで分かっていても聞き取れないと会話できません。はじめは文字も助けに使いましょう。でも理解できたらあとは「聞く」「話す」を基本にしましょう。  
文字が分からない人は文字も並行して学ぶといいでしょう。
- 相手の人の話を分かってあげることは大切です。でも相手のことばを先取りしないでください。相手のことばをじっと待ちましょう。
- 次会う時までには、相手の人が日本語を使うチャンスを作りましょう。  
今日話したことを忘れないためのヒントが、ガイドブックに書いてあります。活用してください。

### 3 - 1) 使い方

#### 1 話題カード

##### 話題カード 表

このカードの会話。たなかさんは日本人、リーさんは学習者。  
ひらがなとローマ字表併記。ただし文字を読んで練習しないように。

話題名と  
その中の整理番号



##### 役割交代マーク

練習ができれば、ボランティアと学習者がリーさんとたなかさんの役割を交代してみよう。  
お互いを知るために交代する場合と、練習のために交代するものがある。

翻訳があるので、学習者に母語で確認してもらうことができる。

##### 自己紹介(Self introduction)B-3

: どうやって ここまで きますか。  
たなか Dōyatte kokomade kimasu ka.

: *How do you come here?*

: でんしゃで きます。  
リー Densha de kimasu.

: *I come here by train.*

: どうやって ここまで きますか。  
Dōyatte kokomade kimasu ka.  
 :  で きます。  
de kimasu.

丸暗記ではなく  
文型を意識してもらおう。

どうやって(dōyatte) ここ(koko) まで(made) でんしゃ(densha) ★  
*how here to train*

バス(basu) じてんしゃ (jitensha) あるいて(aruite)  
*bus bicycle on foot*

会話の言葉と翻訳。  
どの部分がどの意味になるかがわかる。

\_\_\_\_\_部分に下段の言葉を使って、自分のことを言ったり、代入練習をしてみよう。

★「ことば図鑑」参照マーク  
関連語彙が「ことば図鑑」にある。  
ページはカードの裏に書いてある。

**Step 1**

Step 1～3は難易度を示す。学習者の日本語力に応じて使う。  
初級レベルの学習者はステップ1だけを使う。  
もう少し話せる学習者にはステップ2やステップ3のカードまで進んでいく。

Step 1 (ピンク)：ゼロ初級 「日本語に触れてみる」  
Step 2 (黄色)：初級前半 「日本語を使ってみる」  
Step 3 (黄緑)：初級後半 「日本語でしゃべる」

① ②は留意点、ひとことアドバイス  
写真、地図など準備しておくといいもの、  
話題の広げ方のヒント、どの話題カードに  
とべるかなどの情報が記載

話題名とその中の  
整理番号

**家族 D-2**

① ★仕事に関する語彙 (ことば図鑑 p. 8 参照)  
② 「おとうさん」と「ちち」の使い分けに注意しましょう。  
例) 私の「ちち」、～さんの「おとうさん」のように説明するとわかりやすいです。  
家族名称 (ことば図鑑 p. 7 参照)

**step1**

の仕事は 何ですか。  
 職業です。  
 仕事の名称 で 働いています。

★「ことば図鑑」参照マーク

「ことば図鑑」を見れば関連語彙のリストあり。言いたいことがカードの表面、下の語彙では十分言えない時に参照する。

文型

文型を意識してもらうために、文の構造が書いてある。  
 にはどのような品詞がはいるか  
ボランティアの確認用。

## 使い方QA

### Q1. どの話題から始めてもいいんですか？

A 10の話題の中から、その日話したいこと、学習者に関係、関心のあるものを選んでください。最初はユニット1の「自己紹介」から始めてください。次はどの話題からでもいいです。

- ① 自己紹介
- ② 家族(主人/妻、子供、義理の両親、ペット)
- ③ 学校
- ④ 国
- ⑤ 買物 (スーパー、コンビニ、通販)
- ⑥ 食べ物
- ⑦ 日常生活 (病気、病院、ごみ、美容院、床屋)
- ⑧ 余暇
- ⑨ 出産、育児、結婚
- ⑩ 付き合い (近所、日本の家族)

### Q2. 10の話題を全部やらなければなりませんか？

A 全ての話題を扱う必要はありません。

### Q3. 1回やった話題は、もう使えないのですか？

A 1つの話題は1回で終わらなくてもいいです。  
もし話が弾んだら次の回で同じトピックを使ってもいいです。

### Q4. カードはA、B、Cの順番にやっていくんですか？

A 話題カードのA,B,Cはおしゃべりのまとまりを表しています。おしゃべりをしているうちに、違うトピックに話がとんでいくこともあります。その時には全然違う話題カードを使って続けてもいいし、またフリートークになってもかまいません。フリートークになった場合、その中の文法や語彙はあまり意識しなくてもいいでしょう。

カードの裏面に他の話題にとべるヒントが書いてあります。

### Q5. 日本語が全然わからない学習者でも使えますか？

A 初級学習者はステップ1の話題カードを使って、おしゃべりを楽しんでください。ひらがながわからなくても使えます。学習者のレベルに合わせましょう。役割交代や代入練習などは、もし無理ならなくてもいいです。日本語のおしゃべりを通して、学習者との関係を作っていくという気持ちで使ってください。

日本語が少しわかる人は、ステップ1のカードから、そのままステップ2、3のカードへと進んでください。

### Q6. カードはずっと見せながらやるのですか？

A 「聞く」「話す」が大切ですから、必要な時以外は見せないほうがいいです。学習者に翻訳や発音を確認したい時に見せてください。ボランティアが言ったことを学習者がわからなかった時は、カードを見せましょう。

会話をした後で、内の文の構造を一緒に確認してください。(以下省略)